

馬内侍集伝本攷

福井, 迪子

<https://doi.org/10.15017/12226>

出版情報 : 語文研究. 26, pp.39-51, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

馬内侍集伝本考

福井 迪子

一
馬内侍及び馬内侍集については、松井秀氏、本位田重美氏、鈴木一雄氏、竹鼻續氏等の先覚諸氏による業績がある。しかしその殆どが伝記に関する御考察であり、伝本の系統については、本位田氏の「馬内侍集覚書」の中に、流布本と統群書類従本について触れておられるのみである。本稿では、馬内侍集諸伝本間における系譜的関係について述べてみたいと思う。

二

現存馬内侍集の伝本は、『私家集伝本書目』による限りでは次の八本である。

- A 今井似閑本（契冲自筆）（三手文庫蔵）
- B 今井似閑本（山口県立図書館蔵）
- C 写字台文庫本（竜谷大学蔵）
- D 本居文庫本（東京大学研究室蔵）
- E 統群書類従本（国立国会図書館蔵）

F 水野家旧蔵本（書陵部蔵）
G 御所本（書陵部蔵）
H 群書類従本（版本）
このうち、水野家旧蔵本は五十五首のみで、しかも詞書を欠く抄出本の零本であるため、抄出本系的一本として考えるべきものであり、他は完本系に属するが、資料としては非常に局限されている。調査に際して原本に触れたのは、契冲自筆三手文庫本、写字台文庫本、群書類従本の三本であり、他の五本については影写本を用いた。先ず各本の概略を簡単に紹介しよう。

A 今井似閑本（契冲自筆、三手文庫蔵）
馬内侍集・相模集・康資王母集・殷富門院大輔集・後堀河院民部卿典侍集の合綴。25.5×18.4cmの列帖装。表紙は花菱亀甲地に大型花模様（緑青朱の織出し）の緞子。本文の用紙は鳥の子紙。題簽は表紙に無く、扉中央よりやゝ右下に貼附、青・肌色の雲

形模様に金切箔の跡があり、前記合綴五集名を三行に記す、本文と同筆で確かに契沖の手である。墨付二十三枚。本文一面十二行、歌は一行に書き、詞書は歌より三字下り、一行に二十から二十五字程度。集付及び書入がある。本文末に同筆で「別本云 馬内侍伝 大和権守時明女一条院皇后宮之女房自拾遺土新千載入十一代集」と記した紙片貼附。合綴他四集の終り最後の頁に「右契沖師自筆也」と別筆で記す。歌数二百九首。本へ第一頁上段より、長方型「賀茂三手文庫」・瓢箪型「上賀茂ヤ納」・角型「今井似閑」印を捺印。書写年代近世初期。

B 今井似閑本（山口県立図書館蔵）

契沖本と同じく五集合綴。26.4×19.8cmの袋綴。渋紙無地の表紙に合綴五集名を記した16.7×9.3cmの題簽を貼附、その右に題簽に懸けて明倫館整理番号「辰九拾貳」を記す。墨付二十二枚。一面十二行、歌一行書、詞書は四字下げて十九字から二十五字程度。集付・補入・みせ消ち等があり、本文末に契沖本と本文の馬内侍略伝がある。歌数二百九首。冒頭に「明倫館印」捺印。書写年代近世中期。今井似閑筆。

C 写字台文庫本（竜谷大学蔵）

四十人集中の一巻。27.5×20cmの袋綴。表紙は白・渋色の右上り雲形模様の紙表紙で左肩に「馬内侍集」とうちつけ書。遊び紙一枚、墨付二十七枚。一面十行、歌一行書、詞書は二字下り十六字から二十三字程度。集付及び校合書入がある。奥書なし。朱点（朱）は小沢蘆庵と推定されている。歌数二百九（但し補入され

た154番を含む）。見返し右下に「写字台文庫」印。近世末期の書写。

D 本居文庫本（東京大学国文学研究室蔵）

小馬命婦・馬内侍集合綴一巻。袋綴。表紙左肩に「小馬命婦馬内侍集」の題簽がある。墨付二十七枚。一面十行。歌一行書。詞書は三字ないし四字下り十五字から二十二字程度。集付見せ消ち・校合による書入等がある。本文のはじめ内題の下に「大和権守時明女一条院皇后女房」の割書があり、その下に同筆で「朱書成章本」と記す。奥書なし。歌数二百九首（但し154番の補入歌を含む）。書写年代近世末期。

E 統群書類従本（国立国会図書館蔵）

源重之女集・殷福門院大輔集・民部卿典侍集・権大納言典侍集との合綴。25.3×18cmの袋綴。表紙に五集名のうちつけ書。一面十二行、和歌一行書、詞書は歌より二字下り十九字から二十三字程度。集付及び書き入れがある。墨付二十一枚。奥書なし。165番歌から174番歌に至る十首を欠く（一丁落）ため歌数は二百一首である（刊本では他本で補っている）。扉に「東京図書館印、本文第一頁右下に「温故堂文庫」印。近世末期の書写。

F 水野家旧蔵本（書陵部蔵）

卷子本。5 6 7 8 9 11 12 14 15 16 17 18 19 20 21 23 26 27 28 30 33 34 36 39 40 41 42 43 44 47 48 51 53 55 56 57 59 61 62 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 78 79 80 142 番の歌のみを写書したもので詞書はない。歌数五十五

首。字体から推定して、平安末期若しくは鎌倉極初期を下限とする書写年次の卷子本を親本として、近世中期にそれを忠実に透写したものである。書き出し右上に「宮内庁図書印」がある。

G 御所本（書陵部蔵）

23.7 × 17.5 cmの胡蝶装本。表紙は藍色地に七宝草花唐草模様の子、左上に紅色の題簽に「馬内侍集」と外題。本文用紙は布目鳥の子紙に網目、鳳凰唐草、雷文、水藻、桐花散、菊花文等を雲母で捺した変り模様紙。一面十行、歌一行書、詞書三字下り二十三字前後。本文には集付、校異等の書入がある。（以上図書寮典籍解題による）奥書なし。歌数二百五十首（但し105番連歌が106番詞書の中に混入して書写されているが、一首に数える）。本文ははじめに「凶書寮印」がある。近世初期の書写。

H 群書類従本（版本）

卷第二百七十二の中に小町集、檜垣姫集、本院侍従集、小馬命婦集と共に納められている。26.3 × 17.6 cmの袋綴。集付なし。校合書入の形跡がある。文末に「右馬内侍集以村井敬義本校合」

表1 独自異文

契	1	似	9	写	25	本	50	統	95	御	39	群	63
---	---	---	---	---	----	---	----	---	----	---	----	---	----

とある。歌数二百三首。

※歌の番号は統群書類従本の刊本に通し番号を付したものである。

但し、連歌は上下をもって一首とする。歌数も同様に数えた。

※以下に於ては、三手文庫蔵今井似閑本を「契沖本」と、山口県立図書館蔵今井似閑本を「似閑本」と略称する。

三

これらの諸本の中、抄出本たる水野家旧蔵本については一先ず措き、完本について言えば、契沖本と御所本とは江戸初期の書写であるが、他はすべて中期以後のもので書写年代も接近しており、すべて歌順が同一であることから、互に近い関係にあるであろうことが予想される。それでは各写本間の親疎をみるにあたって、まず共通異文の整理結果及び各二本間の異文数を報告しておきたい。

左の表は完本系諸本が共通に有している歌及び詞書についての異文を整理したものである。

本名は、契沖本・似閑本・写字台文庫本・本居文庫本・統群書類従本 御所本・群書類従本のゴジック体の文字の部分で表した。

表2 二本共通異文

本統	2	写本	60
契御	1	御群	27
似御	1	契似	7
本御	1	統群	3
契統	1	似群	2

表3 三本共通異文

写御群	1	契似御	16
本御群	2	写本群	10
似御群	1	契似写	10
統御群	1	写本統	9
契統御	1	契似統	9
		契本御	5

表4 四本共通異文

契似写本	2	契似統御	12
契統御群	2	写本統群	10
写本御群	2	契似御群	7
契写本統	1	契似統群	3
		契似写統	3

表5 五本共通異文

契写本統群	1	契似写本御	2	契似統御群	50
契写本御群	1	契似写本統	25		
似写本統群	1	契似写統御	3		
		契似本御群	1	写本統御群	3
		契写本統御	1	契似写本群	2

表6 六本共通異文

契似写本御群	12	契似写本統御	78
契写本統御群	6	契似写本統御	42
似写本統御群	1	契似写本統御	27

表7 二本間の異文表

群	御	統	本	写	似
127	83	123	158	129	16
130	92	131	163	133	似
178	179	193	69	写	
204	203	219	本		
201	188	続			
123	御				

契

この共通異文数から、お、よその各本の親疎は窺えるが、以下に於てもう少し詳しく考察を試みることにしたい。(以下共通異文数及び各二本間の異文数に関してはこの表を参考にされた)

四

契沖本と似閑本は従来親子関係にあると言われている。これ

を確認するために両者を比較して考察しよう。はじめに形態上から見ると次の如くである。

- 馬内侍集外四集との合綴であることが一致している。
 - 歌数が一致している。
 - 文末に記された馬内侍の略伝が同一である。
 - 一面の行数、字数も原則的には一致している。
- こうした点から見てもすでに両者の親子関係は、ほゞ予想がつくのであるが、試みに家集の1番から50番までの詞書・歌の第一句の字体を調べてみると、次の表に示す如く字体の近似性をも確認することができる。

1～50の詞書(一首詞書なし)	歌
全く同字体	36
一字異なるもの	9
二字異なるもの	4
三字以上異なるもの	0
更に家集全体を通してみると歌や詞書の字体が両者全く一致している例も少くない。次に異文数から見れば、両者の異文数は	34
	11
	5
	0

僅かに十六に過ぎず（表7参照）、独自異文も契沖本一、似閑本九（表1参照）と非常に少く、殆ど同一に近い本文であることが分かる。そこで異文について、似閑本の誤写をみると、その異文十六個所のうち九個所までが明らかに契沖の文字そのもの、書き癖による曖昧さに起因するものであり、他は目移り、錯覚等に因る誤読のようである。兎も角もこれらの異文を生じた個所において、誤写の原因となりうる何らかの要素が、契沖本の方にもあったことは確かである。又、似閑本には十九個所のみせ消ちがあるがそれらは契沖本の文字を忠実に写しとるために自らの筆の誤りを正したものと、親本のまゝに写しとったところの曖昧な文字を後に正したために付けられたものである。こうした点からも、かなり忠実に書き写そうと努めた書写者の態度を窺うことができる。

契沖本には若干の語彙的に通じかねる個所がある。例えば、31 としふともきゆるよもあらし白雪の千とせのつまにふり

しつもれば

202^{註7} このころもろともにある人つとめてのきはのけしきなむ
いとあはれなる……

などそれであるが、こゝに見る如くその個所には傍注がつけられており、親本の誤りのまゝを忠実に伝えていることが知られる。この場合にも似閑本が契沖本のまゝを伝えていることは言うまでもない。結局契沖本は、いくらかの誤りを含んではいいるが、それは親本の伝えた誤りをそのまゝ伝えているものであり、他本に比して誤写数は格段に少く、古い形をよく伝えているものと思われる。また似閑本は、以上見てきたことよって確か

に契沖本を親本としてかなり忠実に書写せんと心がけ、臨摹したものであろうことが推測できる。が、更に契沖と似閑が師弟関係にあることから、師契沖自筆本を親しく臨摹したであろうことは容易に首肯できることである。

五

次に歌数の上から契沖本と同系統と推定される「写字台文庫本」及び本居文庫本に目を転ずれば、この両者は行数、字詰、字体、書入に至るまで全く驚くほどに酷似している。二本間の異文表によると、両者の異文数は六十九（表7参照）で、他のどの本との関係よりも最も近い関係にある。又、更に二本共通異文数六十（表2参照）、という密接さをもっている。しかし、これ程親近性が強いにもかかわらずこれを直接的な親子、もしくは兄弟関係と見なすには聊か躊躇せざるを得ないいくつかの問題がある。その一つは、両者の異文六十九の中には、写字台文庫本に二十五の、本居文庫本に五十の独自異文を含んでいることである（表1参照）。勿論単なる誤写関係とみられるものも多いのではあるが、その中には次に例示する如き、単なる誤写及び直接的な誤写とは考え難いものをも含んでいるからである。

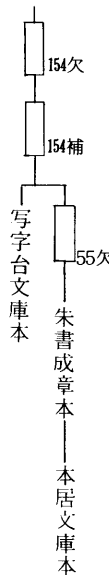
写字台文庫本

本居文庫本

- | | | |
|-----|-----------|----------|
| 5 | あくかれぬらし | あくかれなまし |
| 36 | その文に | その冬 |
| 49 | たもとは野へなれや | 我身は野なれはや |
| 63 | さつき山 | さつき志 |
| 143 | 思へることよみてと | 思えることのと |

198「たのこひのはこにすゑて たのこひのこもすゑて
 49番は諸本「我身は野へなれや」であつて、「たもとは野へな
 れや」の写字台文庫本も「我身は野なれはや」の本居文庫本も
 共に独自異文ではあるが、特に写字台文庫本に於て「たも」と
 となつた過程については、にわかには説明がつかず、単なる誤
 写とは解することができない。又其他の例に於ても、おそらく
 直接的な誤写と考えるには無理のあるものばかりであり、いつ
 れにしても同一親本を転写したものでないことだけは言えるで
 ある。いま一つの理由は、本居文庫本には「朱書成章本」と
 の注記があり、55番の詞書及び歌に「朱」の字が付され、65番
 の書入「イニナシ」にも「朱」と記されている。是をもつて「
 朱書成章本」と注記された所以であろうとみるのであるが、同
 一親本を転写したとすれば、当然写字台文庫本にも記されてい
 なければならぬはずのこれらの記入が無く、65番の書入に「
 イナシ」とのみ書かれているのである。しかしこれは「イナシ
 」であつて、前者の「イニナシ」とは異り、勅撰集や私家集か
 らの書入、校合の跡も多くみられるこの本のことであり、且つ
 墨と朱できつちりと書き込まれている事からみても、おそらく
 は成章本のそれとは関係なく独自に書入れられたと見る方が妥
 当であろう。また集付にも若干の相異があり、やはり本居文庫
 本は、直接或は間接に朱書成章本を転写したものであるのに対
 して、写字台文庫本は別の親本から転写されたと思われるばな
 らないであろう。以上、兎に角両者が非常に似通つてはいるも
 の、親子もしくは兄弟関係であるとは断言できない理由をあげ

て来たが、両者に共通する事として次の一点がある。それは、
 154番の歌が本文中には無く、153と155の間の余白に詞書と共に一
 行に補入されていることである。先に考察した通り、本居本は
 成章本を転写したと見られるが、写字台文庫本は別途をたどつ
 たと見られる事から、154番の補入されたのは、少くとも成章本
 以前と考えるのが妥当ではなからうかと思う。換言すれば、154
 番歌を補入した本を親本として写字台文庫本と他一本が転写さ
 れたが、他一本には55番が落ちており、それを成章が朱で補い、
 更にそれを親本として書写されたものが本居文庫本であろうと
 推定される。図に示すと、



右の如くなり、本居文庫本は現存本中最末流に位置することに
 なる。

猶、この両本に書入れられている校合校異文の中には、本稿
 で対象とした諸本の本文と異つた語彙が若干みられる。これは
 他にもいくつかの伝本の存在していたことを暗示するものであ
 る。

六

次に問題になるのは統群書類従本である。現存のこの本には
 一丁の落丁があり、165番の歌から174番歌に至る十首が欠けてい

る。又、巻末の四首は御所本、群書類従本の流布本系には入っていない。詞書からしても、先覚の研究にある通り勅撰集からの補入とみるのが妥当であろう。しかし、四首の中、208番209番の二首は、契沖本・似閑本・写字台文庫本・本居文庫本の各本にも書写されているところから、この二首は、いわゆる流布本系と契沖本・似閑本・写字台文庫本・本居文庫本・統群書類従本をひとまとめとする系統とが分れて間もなくの早い時期に補入されたものであらうと思われる。そして更に統群書類従の流れに於て重ねて210番211番の二首が補入されたのであらう。

この本は形式の上からみれば、ほゞ契沖本と同様に書き進められている。文字には非常に強い癖がある。そのため生じた誤写か、或は親本ですでにくずれた文字になっていたものを忠実に写しとった為に一そう判読し難いものとなったものか、虫損二ヶ所の形をも写しとっているところからすれば、或は後者であらうかとも思われるが、書き癖を十分考慮に入れて読んでなおかつ判読し難い文字がまゝあり、独自異文九十五を数える(表1参照)。従つてそれらの独自異文の殆どは明らかに誤読誤写によるものであつて、作爲的な訂正と認められるものは皆無と言つてよい。諸本との異文数からすれば(表7参照)、契沖本や似閑本には比較的近く、他とは隔りのあるように見られるが、三本共通異文表で見れば「契・似・統 9」に対して「写・本・統 9」(表3参照)と同数であり、遠い関係とみられることがよみとれる。このことから、近い上位本に於て、これらの諸本がやはり流れを一にしていたと見て差つかえなかるう。

七

御所本は14番16番の歌の無い系統である。しかし異文数からすれば、1416番の歌を含む契沖本・似閑本に近い関係を示している(表7参照)。そこで契沖本と御所本の二本を比較検討してみると、ほぼ同時代に書写されたにもかゝらずこの二本の形式、字体、歌数からみて直接的な関係の無いことが推察できる。また御所本には集付の記入が最も少く、新勅撰、統古今、玉葉、続千載、続後拾、風雅、新拾遺、新後拾遺の各集付は付られていない。おそらく集付のつけられた初期の姿を留めているのであらうかと思われるが、この本の集付には二ヶ所の誤りがある。その一つは162番、

やすらはてねなましものをさよふけてかたふくまでの月をみ
しかな

かの有名な赤染衛門の歌として後拾遺集にとられ、馬内侍集にも入つていて一つの問題を投げかけているこの歌に、「後拾」とあるべきところ「後撰」と誤られている。もう一つは172番の歌、

梅花いくとせ春をへたてゝかむかしわすれぬけふにあふらん
に「秋風・新古」と二つの集付がある。秋風集には「巻第十七雑歌上、よみ人しらず」もとすみけるところに歸りて梅の花のさかりなりけるをみて」との詞書で確かに入っているが、新古今集には無く、これも誤りである。

共通異文面から見ると群書類従本とは二本共通異文二十七を持ち強い関係を示している(表2参照)。反面また遠い関係と

みられる本居、写字台文庫本との三本共通異文も五ヶ所有り（表3参照）、契沖本系の本文を「イ本」として扱っている点もあって、御所本の系統は祖型に近い時点で早く分れたものであらうことが想像できる。

八

最後に群書類従本について考察しよう。歌数は二百三首である。特徴としては、集付が全くないこと（刊本に集付が付けられているのは校訂者の所為であろうか）、村井敬義本との校合がなされているが定本が定かでないことがあげられる。歌数の面からすれば、14番16番の歌が欠けているため契沖本や統群書類従本系とは異り、御所本と同系である。が、更に83番の歌84番の詞書及び159番の歌160番の詞書を欠いている。本位田氏も言われる如く、これは誤脱と見るより他なからう。

「日本歴史」四十三年三月号で塙保己一の群書類従本編纂態度の窺える一文を益田宗氏が草しておられるので、少し長いが引用させていたゞく。

当時としてはそれであったかも知れないが彼は、底本を校するに他の一本を以ってして、しかも底本が誤りて対校本が正しいと考えた場合、遠慮なく底本の本文を対校本の本文に摩替え改め、傍に「イ○○○」として僅かに底本の本文を残すのである。巻末に、流布の木版本で、底本を校訂したといっている「イ○○○」の意味は、校訂に使用した一本を指すのではないのである。つまり群書類従の本文は、系統上では折衷された本文であり、その「イ○○○」も折衷された一本なのである。ともにそれ以前存在した一本ではないのである（以下略）。

そこで馬内侍集に於ても村井敬義本校合と記されているが、右の解釈によって何らかの折衷本であるかも知れないと見なければならぬであろう。しかし敬義本が現存しないので、それが如何なる系統に属したか知る由もないところである。

本文は、異文数の示すところでは御所本、契沖本に近い（表7参照）。御所本との関係を二本共通異文表（表2）で見ると、二十七個所の共通異文があり、その中「御群・契似写本統」の型に整理されるものを拾ってみると二十個所ある。その中のいくつかによって例を示してみよう。

御・群

契・似・写・本・統

17 むねの思ひは

むねのけふりは

43 じめにやみえけむいひ

夢にや見えけん

たるに

50 おなしき九月はかりに

おなし君九月はかりに

90 こさりしかは……

こさりしに……

風（原）のふきしに

風（原）のふきしかは

115 いみしうふるといひを

おそろしくふりたるといひ

こせたれは

たれは

133 わひし

くるし

134 いへは

いひたれは

155 いづれのさとの

いかなるさとの

50については、仮名書の「み」の脱落からの誤り、155は「い可（原）那る……いづれの」等の誤写関係を強いて考えられなくもないが、他は急には解決し難いように思われる。つまり、御所本・群書類従本のグループと他方のグループにかなりはつきりと系

統を分つてきていることを示している。しかし契沖本との関係が殆ど御所本との関係と差のないことから（表7参照）やはり何本か上位に於て同一系統に属したことを察することができる。

九

以上完本系の各本について系統を考察して来たが、一応簡単にまとめてみると、馬内侍集の伝本は、六本共通異文表（表6）の数値が示す通り互に接近した関係にあり、同一祖本から出たものである。そしてその中で二つの系統に分れる。即ち一方は1416番を持つ契沖本・似閑本・写字台文庫本・本居文庫本・群書類従本の流れであり、他方は1416番を持たぬ御所本・群書類従本の流れであると言ふことができる。

現存本の祖型を考えるに当つて、問題は1416の歌が、もともと家集中に無かつたものが勅撰集から補入されたと見るか、或は最初から家集中にあつたものが流布本系で脱落したと見るかに集約されてくる。問題の検討に入る前に1416番の歌を紹介しておこう。

馬内侍集（契沖本）

14 勅撰集（国歌大観）
新古今集恋三（一一六一）

人に物いひはしめて

わすれても人にかたるなうた

ねのゆめみて後もなかくらしよ

を

16 新千載集恋一（一〇一二）

したのはかまのこしに結び

下の袴の腰に結びつけて

謙徳公のもとにつかはしける
謙徳公の許に遣しける

人しれず思ふころのしるけれど
人知れず思ふ心のしるければ
はゆふともとけよ君か下ひも
ゆうとも解けよ君が下ひも

この点について、本位田重美氏は1416補入の立場に立つておられる。そして、氏の言われる「現存馬内侍集の祖本の型は、流布本に84の歌85の詞書、160の歌、161の詞書を補つたようなものであつたと考えられる」に相当する現存本は、御所本そのもの、形である。しかし補入と見られる理由としては、氏の言葉を用すれば

十四、十六は、集の中間にあるので、流布本系の脱落と見るか、それとも統類従本が補入されたものと見るか、問題はあつたが、十六はやはり「けり」を用いてあるので、新千載集よりの補入と見た方が当つている公算が多い。十四の方は、このような決め手がないのでいづれとも決定しがたい。たゞ集中の勅撰入集歌（統詞花集や秋風和歌集のような私撰集をも含めて）の詞書を勅撰集のものと比較すると、勅撰集ではすべて何らかの手が加えられており、十四のような全く同文のものは他に例を見ない。それで、いちおう十四も勅撰集から補入されたものと見ておきたい。

とされている。確かに氏も懸念されているように一般的にいって、集の途中に少数の歌が補入されることには疑問がある。そして又、14の詞書は「人に物いひはしめて」というだけの非常に短いものである。それ故にそれ以上詳しく或はより具体的になるよう手を加える必要はなく、もしこのまゝ勅撰集にとられたとしてもむしろ自然であつて是非を論ずるまでもない

ように私には思われる。又16の「けり」について、本位田氏の「き」を経験・目睹回想、「けり」を非経験・伝承回想とされる見方——即ち従来のこの見方に対する反論も多く、この場合も「けり」を非体験とみることは必ずしも妥当ではないように思われる。これについては、春日和男先生の「あなたなる場註」の事を現場に迎え取る姿勢を示すのが「けり」の本義であつて、その限りにおいて別世界の事象として超時間的に客観する態度にもなる」との御高見に従ひ、馬内侍集のこの「けり」も「別世界の事象として超時間的に客観する態度にもなる」という立場から、過去を現在にむかえとり、それを客観化して表現する内侍の態度そのもの、表れとしての「けり」とみる。それは三者的表現、物語化的表現ともなるもの——と解する方が妥当ではなからうかと考えている。

扱、抄出本たる水野家旧蔵本について触れなければならない必要が生じたようである。水野家旧蔵本は、卷子本で字体が古く、「私家集伝本書目」にも「摸写」との註記があるところから、その親本の書写年代の古さが想像される。前にもふれた如く、これには詞書もなく、五十五首の歌だけが抄出書写されているのであるが、今問題として取り上げている1416の歌が含まれており、歌順も完本系諸本と同じ順序を保っている。従つて系統的には完本系と祖本を同じくする抄出本系の一本であると考えられる。

そこでもう一度1416の歌に問題をかえしてみる。この二首のうち14には「新古」、16には「新千」の集付が、契沖本、似閑本、本居文庫本及び統群書類従本の各本につけられており、言

うまでもなく勅撰集入集歌である。が、問題は16の入集している新千載集の成立——北朝、後光厳院の延文元年二条為定の撰により成る——と、その字体から相当古さの感じられる水野家旧蔵本の親本の書写年次のいづれが古いかに及ばざるをえない。何故なら、もし水野家旧蔵本の親本の書写年次の方が古いとなれば、1416の二首は、元より家集中にあつたことがほゞ確定的となると考えるからである。

この点について、この程書陵部の橋本不美男氏より次の如き御教示を仰ぐことができた。即ち

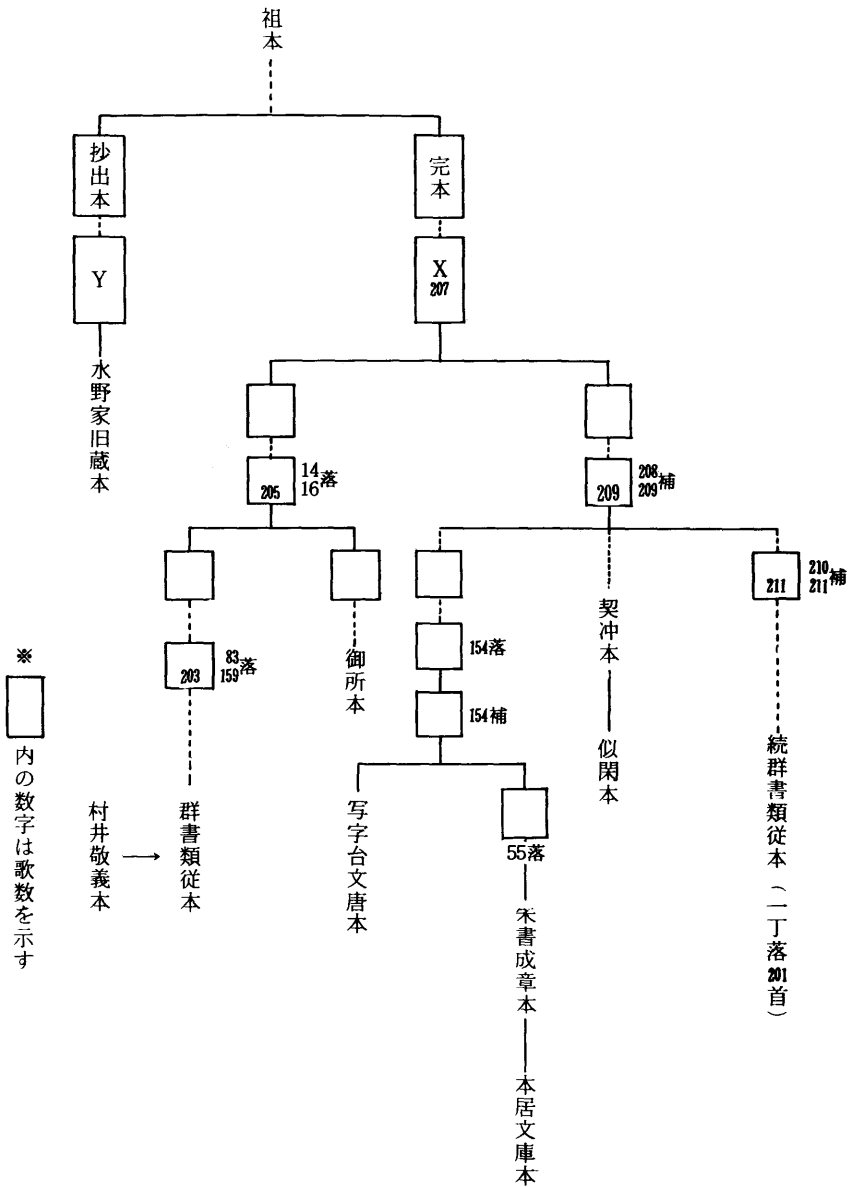
○水野家摸写本には、親本の紙の大きさ、紙継ぎ箇所も示して居り、それによると六紙の卷子本で、紙継ぎ個所に歌の本行が書かれているので、親本も天地、縦に墨界のあつた用紙を六紙つないだ、はじめからの卷子本であることが判る。

○親本を忠実に透写している。従つて親本の字体で大概時代判定しても良いと思う。親本の書写年次は、下限は平安末、鎌倉初期を降らないと推定してよいと思う。

との御見解である。これによれば、新千載集成立よりも早い平安末ないしは鎌倉初期の馬内侍集に於て1416の歌は確かに家集中に存在していたということになる。それ故、おそらく祖本においても1416の二首共に元々入つていたものであつて、補入されたものではないと言ふことができよう。

十

以上考えて来た諸本の系統上の地位を図にまとめてみよう。



この図によってもほぼ明らかのように、結局私の考察してきた範囲に於ては、多少の誤字を含んではいるが、完本としては、古い型を伝えていっているものとして契沖本の本文批判的価値が認められてよからうと思う。従って本文研究も契沖本によってなされて然るべきであらうと考えるのである。

なお契沖本を、平安末もしくは鎌倉極初期の姿を部分的ながら直接伝えていっている水野家旧蔵本の本文と比較してみる必要があるかと思う。次に示すのは、その相異の顕著なものである。

契沖本

水野家旧蔵本

53 なきなたつ袖もありしをきり
くす草つつけしと何か鳴ら
ん

なきなたつそもありしをきり
くす草つつけしとなに
なげくらむ

68 草枕たひねの衣かはかすは夢
にもつけんおもひをこせよ

くさまくらたひねのころか
はらすはゆめにもつけむおも
ひをこせよ

72 いかなればしらぬにおふるう
きぬなはくるしや心しれす
のみ

いかなればしらぬにおふるう
きなはくるしやひとめしれ
すのみ

75 ねさめにはきゝもしつらんよ
もすから雨のこゑにはをとり
やする

ねさめにはきゝもしつらんよ
めふれはよもすからをとりも
やする

こうしてみると、完本の中では古い姿を伝えているとみられる契沖本でさえも、水野家旧蔵本に比べてはこうした相異があり、水野家旧蔵本本文の方が、より元の姿に近いものであることが窺える。かゝる点からも、より古い姿を見、本文研究の上

に何らかの手がかりを得る資料として、水野家旧蔵本をも参考とすべきだと思うのである。

注

1 「馬内侍伝」(「わか竹」大正二年十一月、十二月、三年二月号)

2 「馬内侍集覚書」(「人文論究」昭和三十五年六月号)

3 「馬内侍——その生涯を中心に——」(「国文学」昭和三十四年三月号)

4 「馬内侍伝の一資料——時明集の作者をめぐる——」(「文学・語学」十三号)

5 図書寮典籍解題には桂宮本とある。

6 竜谷大学図書館司書長平春生氏より口答により御教示を得た。

7 コ：詞書

8 本位田重美氏「馬内侍集覚書」

9・10 右同論文 p.21

11 本位田氏論文における歌の番号は、統群書類従の刊本の歌に番号をつけたものであるが、連歌上下をもって二首と数えているため、本稿に用いた歌番号とはずれを生じている。

12 本位田氏前掲論文

13 「助動詞「けり」の二面性」(「言語と文芸」二十四号)

14 橋本不美男氏より今井源衛先生への私信による御教示。

〈付記〉

本稿は、去る五月二十六日、九州大学国文学会に於て発表した草稿

に加筆したものである。

に加筆したものである。